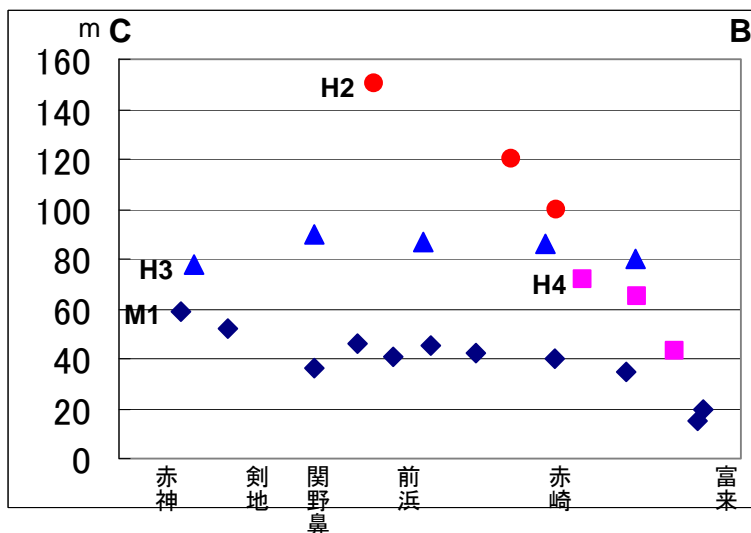
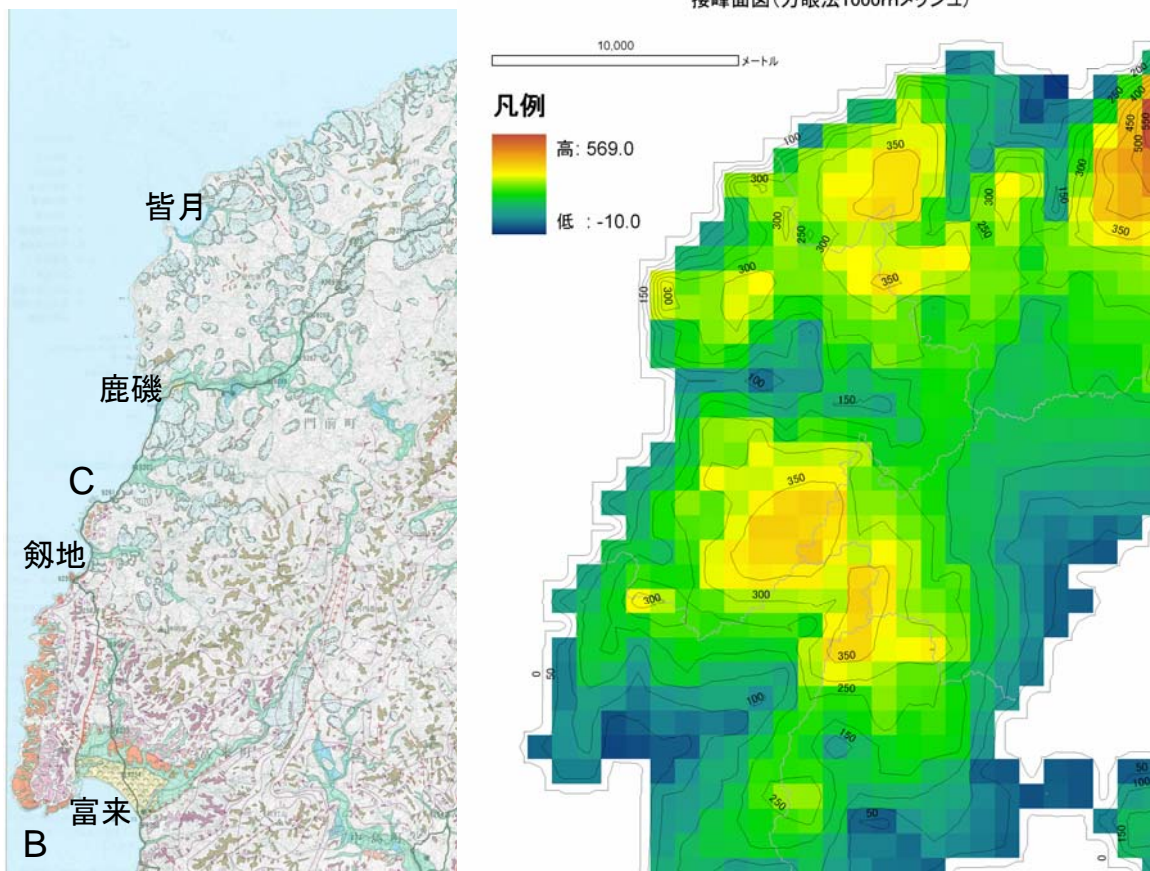


## 地形からみた能登半島地震震源域周辺の長期的地殻変動



(太田・平川1979のアイデアに基づき  
 国土地理院1997をもとに作成)

上段左は1997年に国土地理院が作成した10万分の1地殻変動土地条件図の一部(能登半島地震震源域周辺)である。富来～門前の西海岸には数段の海成段丘がよく発達し、特にM1面(オレンジ色)は連続性がよい。下段の図は各段丘の旧汀線高度を示したものである。M1面は、B付近で約20m、C付近で約60mで、北に向かって高度を増している。同様の傾向は高位の段丘にもみられる。これは、SARや生物痕により示された今回の地震に伴う隆起パターンと整合することから、今回の地震と同様の地殻変動が地震のたびに繰り返し、累積していると考えられる。M1面におけるBとCの高度差40mがすべて今回の地震による隆起パターンで形成されたとすると、平均活動間隔はおよそ1000年となる。一方、上段右の図はデジタル標高データから作成した1kmメッシュの接峰面図である。断層の東方延長を挟んだ両側の山地の高度には差が見られず、変位を累積させる断層が東方の陸上部へ延長していることは考えにくい。(宇根 寛)